

学校名	岐阜県羽島市立中島中学校

活動のテーマ	自然災害についての理解を深め、減災及びリーダーとして行動できる生徒の育成
主な教科領域等	教科領域（理科・家庭科・学校行事・総合的な学習）
活動に参加した児童生徒数	（1，2，3学年 204人）（複数可）
活動に携わった教員数	23人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	200人 【保護者・地域住民・その他（市危機管理課職員）】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可）
実践期間	西暦 2019年 4月 1日 ～ 西暦 2020年 3月 31日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（ ）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

- ① 生徒に災害や減災についての知識及びリーダーとしての力を付ける。
自分が生活している地域に起こる可能性の高い災害について原因や具体的な災害程度・規模について知る。
- ② それらによる災害を減らすには、事前に、また、その時、その場でどのようにしたらよいのか、中学生・青年として、どんなことができるのかなどについて知る。
- ③ 避難所で生かせる力をつける
教員の指示に従って避難するだけの立場から、自分の命を守るだけでなく、自分で考え、自らの力・長所・個性や身近にある物を自分で考えて生かし、自分以外の人への支えになろうとする意識を高め、力をつける。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

災害を「知る」・自分が「できる」・自分から「動ける」を目指した3年計画の策定・実践（本年度は1年目）

- ① 市役所防災担当課との連携、市からの協力を進める。
 - ・全校生徒に防災備蓄倉庫内の備品の紹介、使い方の実演、非常食の試食
- ② 自分に身近なこととして考える。
 - ・自分の通学路で水害の危険のある箇所を考える。ハザードマップで自宅の位置を確かめる。
 - ・学校が避難場所になったとき、使える物・使い方を考える。本校の緊急時開放エリア図を知る。
理科室：手回し発電機、調理室：食器、武道場：畳 など
- ③ 教科の学習内容と関連付けて学ぶ。
 - ・理科：1年地震、2年水害、3年発電・気候変動
 - ・技術：電気コードの作成、LEDライトの作成 など
- ④ 地域との連携強化
 - ・同窓会、学校運営協議会、PTA役員会への取組紹介と情報提供の依頼
 - ・非常時の学校施設利用図の配布、災害用伝言ダイヤル等の紹介

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金・研修受講前）と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

- ① 生徒が考える機会や体験を通すこと、また、より身近に感じさせることの大切さを一層感じた。
- ② 受け身・公助頼みから、自分で守る・自助の重要性を他へのサポート役としても意義づけるようになった。
- ③ 校区の浸水想定図と本校の緊急時開放エリア図（避難場所としての配置・区割り図）をカラー印刷し、学習および地域団体との会合で活用した。テーマ「私の家の一階は大丈夫？」「下校直後、戻る？行く？」
- ④ 非常食や災害時用品を購入し、試食や体験活動・紹介に活用し、より身近に感じさせることができた。

4) 実践の成果

① 減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

これまでの「命を守る訓練（避難訓練）」では消防署のみとの連携だったが、市役所防災担当課との連携・協力が進んだのを始め、地域などに連携範囲を広めることができた。同時に、関係団体の声や期待を聞くことができ、学校の取組への理解も進んだ。

- ・ P T A役員会、同窓会役員会・総会、学校運営協議会、学校保健安全委員会で取組を紹介し、情報提供の依頼（用紙配布）をした。
- ・ 保護者に災害用伝言ダイヤルと無料体験の紹介、校内およびコミュニティセンター等へ地域の浸水想定図と本校の緊急時開放エリア図非常時の配布、掲示依頼をした。一部自治会で配布した。

② 生徒にとっての具体的な学び（変容）、身につけた力（資質・能力・態度）。

<自分に身近なこと「じぶんごと」として考えた。>

- ・ 自宅・自分の通学路で水害の危険のある箇所を考えたり、市の浸水想定図で調べたりした。
- ・ 自分の掃除場所での危険箇所を自分の目で確かめたり、考えたりした。生徒目線での発見があった。
- ・ 学校が避難場所になった時に使える物・使い方を考えたり、幼児・老人やけが人の対応、精神の安定について自分のできることを考えたりした。（年少者の遊び相手、高齢者のマッサージ、楽器演奏など）
- ・ 校内の防災備蓄備品と使い方、地域および本校在校生に防災士がいることを初めて知った。
- ・ 補助金で購入した非常食および市から提供を受けた備蓄期間近の非常食を、生徒家族と本校職員で2回試食し、感想を得た。また、簡易トイレの紹介や防寒（サーマル）シートの着用体験ができた。

③ 教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

- ・ 教員 本校の備蓄倉庫内の備品を知った。市・地域・他校の減災・防災への様々な取組を知った。
- ・ 保護者 非常食等について知ることができ、家庭でもその必要性について考えるようになった。
- ・ 地域の方々 「とても大事な取組だ。会として考えたい。ハザードマップを配布したい。」

5) 工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

- ・ 10月から隔週水曜日の給食時、水害・防災・減災・対応等について啓発放送（「水がいい＝水害の日」）を始めた。この中で、生徒の反応や非常時に役立つアイデアを紹介し、生徒の関心が高まった。
- ・ 生徒自身が自分の目で確かめたり、自分の関わりの中で考えたりすることを導入した。

6) 実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

- ① 本年度始まった県と大学との連携による防災・減災への取組に参加し、多くの地域・学校が取組を進めていることを知った。大いに今後の参考（「できる・動ける」）になった。
- ② 発災時・発災後についてより具体的にイメージできるよう、様々な機会に体験・制作を取り入れていく。

7) その他（※特にあれば記述）

- ① 校内の担当者がかわってもアイデアと意欲・意識をもって継続して進めることが極めて重要である。
- ② 防災・減災への必要性は感じているが、対応のための体験や日常生活での具体的な備えのある家庭・大人は少ない。まだ、「ひとごと」「そのとき」「公助ありき」「なんとかなるさ」という感覚が多いのではないだろうか。